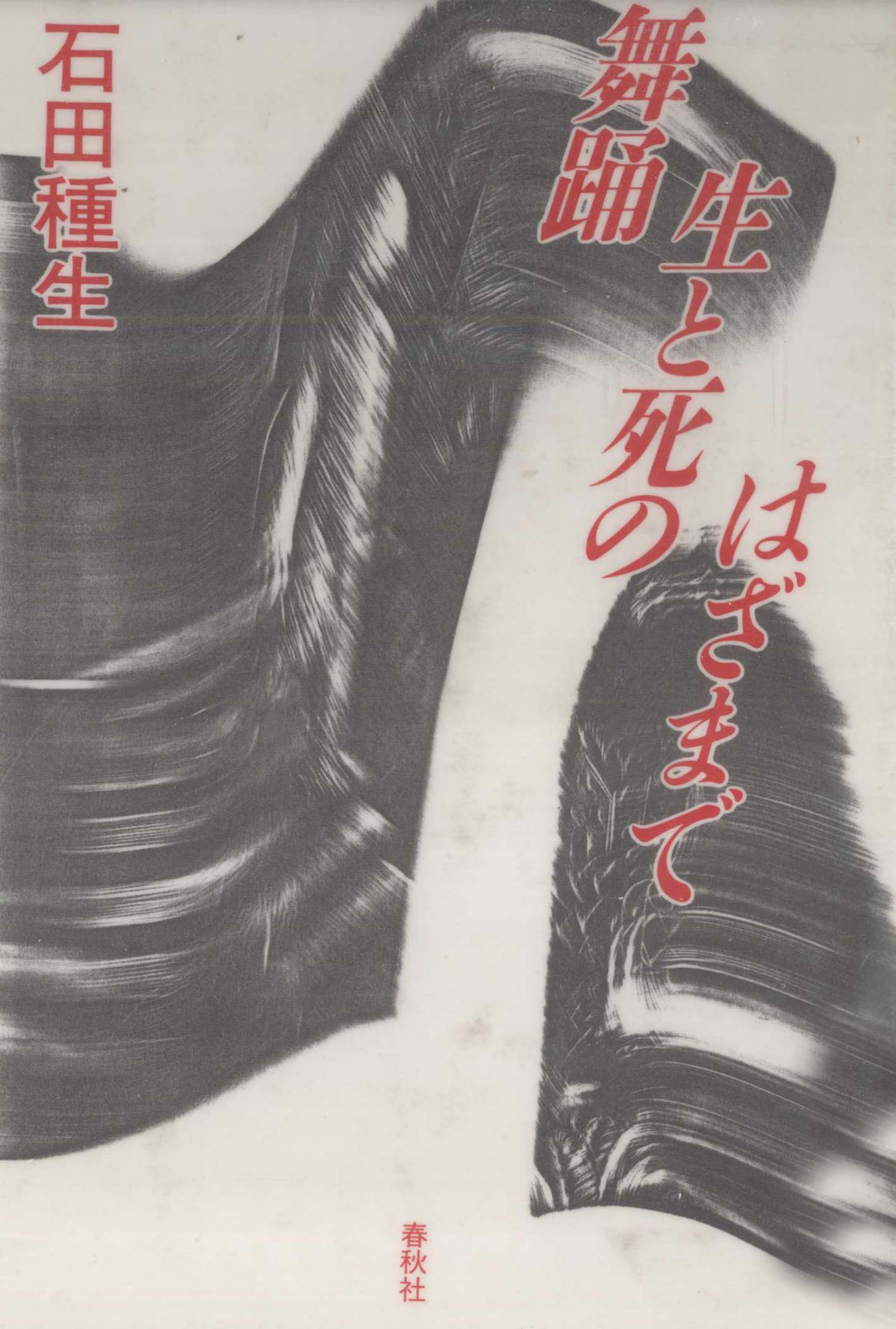




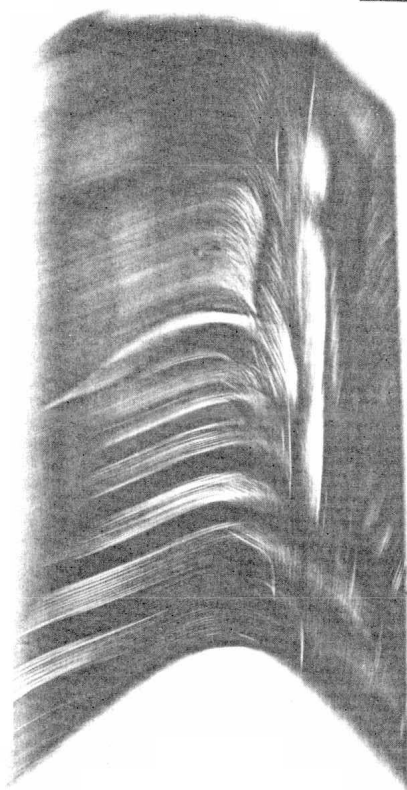
舞踊生と死のはざままで

石田種生

春秋社

石田種生

舞踊生と死のはざままで



春秋社

著者略歴

石田種生（いしだ たねお）

1929年島根県大田市生まれ。

慶応義塾大学文学部美学科卒。

在学中にバレエに興味を持ち、この道に入る。

1969年、文化庁派遣在外芸術研修員。

数多くの古典、新作バレエに主演する一方、〈枯野〉〈影武者〉
〈祇園祭〉など日本の風土に根ざしたバレエの創作に手を染め、
スイス、韓国、アメリカなど各国バレエ団でも上演、好評を博す。
文化庁舞台芸術創作奨励賞、橘秋子特別賞など多数受賞。

現在、東京シティ・バレエ団理事。

著書：『バレエのすべて』（あいびい・はうす）、『舞踏への旅標』
（三省堂）、『ポリショイ・バレエ「白鳥の湖」』（音楽の友社）他。

舞踊生と死のはざままで

一九九三年五月三〇日 第一刷発行

著者 石田種生

発行者 神田 明

発行所 株式会社春秋社

東京都千代田区外神田二一八―六（千一〇二）
電話〇三―三二五五―九六一― 振替東京八―二四八六―

印刷所 萩原印刷所

製本所 株式会社徳住製本所

装丁 永畑風人

定価はカバー等に表示してあります

1993 © ISBN4-393-49512-8

目次

第一幕	信じられない出来事……………	3
-----	----------------	---

第二幕	死の淵からの生還……………	14
	N 医大病院にて……………	

第三幕	バレエへの祈り……………	81
	B 医大病院にて……………	

第四幕	夢、ふたたび……………	152
	コロラド・デンバー公演……………	

舞踊生と死のはざまで

第一幕 信じられない出来事

それは、とてもさわやかな目覚めだった。

そこらじゅうに白い光が散らばっていて、私は雪の広野にいろいろな気持ちをした。光はつややかだけれど、まばゆくはない。胸いっぱい空気を吸い、肘を張って背伸びをしようとした。

あれっ、動かない。

足もベッドに括りつけられているみたいだ。

頭は枕のなかに、すっぽり埋れて、回らない。

だが、目玉は回るようだ。

真っ白い天井をながながと這っている生青い蛍光灯が見えた。

どこからともなく、うっすらオキシフルの匂いが漂ってくる。

おい、ひょっとして、ここは病院じゃないか。

そう思い思い、目玉をもう一度念入りに回転させてみると、上も下も右も左も全部が白く、ここは白い箱のなかみたいである。

やっぱり、病院の病室に相違ない——とすると、風邪でもひいたのかなあ。チューリッヒのツェハア・タンツ・シアターに委嘱されて創ったバレエ〈壊れた影〉の舞台稽古が三月二十七日に予定されていたから、それをやりにスイスに来て……情ない。風邪をこじらせてしまったらしい。

しかし、ちょっと待てよ。これはおかしいぞ。右眼と口だけ残して、頭も顔もぐるぐる包帯だらけだ。たかの知れた風邪ぐらいで、この格好は大袈裟すぎやあしないか。

少しちぐはぐだとは感じたけれど、さほど気にはならず、私は再び熟睡したあとの心地よさのなかに浸りだしていた。

どのくらい経ったのか。

ふと気がつく、右側のそこも白い扉の入り口に、ぽつんと一人の男が立っている。か

すんでいた眼の焦点があつてきた。

「あつ、いーちゃん」

私の兄弟は一番上が姉、それから後は男ばかり五人つづいて、どん尻が私。私が呼んだ「いーちゃん」の名前は出穂^{いすほ}。四番目の兄である。

「よう眠つとつたのオ。どこぞ痛いことないか」

兄弟で話す時は、いつもこんなぐあいに田舎弁まるだしになる。

「それにしても、ようここが分つたなァ。探すのに難儀したろがい。言葉が通じたァ」
なにげなく尋ねたのに、兄の表情は強ばった。

「種生^{たねお}。お前、ここがどこだか、まだ解らんようだなァ」

「解つとらい。ここはチューリッヒの病院だろがい。スイスの……。わし、風邪ひいてしもて……」

と返事しながら、私の上顎と下顎がずれているのに気がついた。舌で口の中をなめまわしてみると、下に歯が二本しかない。声が前に出ないで、横に漏れていく。

「な、なにーィ。チューリッヒだと。今日まで何回も言うて聞かせたに、まだ解らんか。きのうも言うたが、ここは、ト・ウ・キ・ヨ・ウ、東京だ。」

お前はな、スクーターでダンプに激突して、救急車でこのN医大病院に担ぎこまれて来たんだ。いいか、よー聞けよ。お前は交通事故を起して、死にかけていたんだぞ」

ひと言ひと言かみくだくように、私がしたこと、されてきたことを、私の手を握って揺さぶりながら懸命に説明してくれたが、聞く側の反応はとろく、「激突」という固い言葉に一瞬ぎくつとしたものの、かといって、そんな覚えはどこにもないから、また涼しい顔にもどってしまった。

話上手な兄の語りぶりはしだいに講談めいてきて、「はい、それからどうした」と合いの手を入れたくなるほど佳境にはいつてきたが、いま聞かされている大事件が、どうしても「自分ごと」とは思われない私は、少し前に飲まされた睡眠薬が頭にまわりだし、せつかくの熱弁も木霊こだまのように遠のくばかり、そのうちに、すっかり消えてしまった。

私が意識を回復して、最初に話した相手は出穂兄だったように思う。が、その場所が集中治療室だったか、一般病棟に移されてからのことだったかは、はっきりしない。「三月の末。確かみぞれが降っていた」そうだけれど、その点については兄もうやむやである。

兄は毎日のように足を運んでくれ、来るたびに、衝突のショックと裂傷で頭のたが、の緩

んだままだら助のようになってゐる弟の私を、なんとか正気にもどしてやろうと、根気よくいろいろなことをやって試してくれた。

私の名前を言わせてみたり、自分を指して「おい、わしが誰か判るか」と覗きこんだり。しかし、私はだら助のままだった。

このありさまをかたわらで見聞きしていた妻の慧子としこは「お兄さんは、子どもをあやしているみたいだった」と述懐する。

自分や兄の名前は、すんなり答えるけれど、「ここはどこだ」と訊ねられると、しばらく考えこんで、

「広島だ」「福岡だ」、「いや仙台かな」「稚内じゃない……とすると、分った、ここは鹿児島だ」

などと並べたてる地名は、その日その時によって、てんでんばらばら。こんなあんばいだから、二人のやりとりはいつもすれ違い、ちっとも絡まらなかった。

脳味噌のねじがゆるむと、思考力はよじれて膨らむものらしい。しばらくあとになって、兄に、

「あの頃のお前は、ほんに、唐人とうじんみたいだったぞ」

と釘をさされたが、そう言われたことで、当時の私がどんなふうだったか、手にとるよう判った。

その「唐人」。

私たちの田舎では、とんちんかんな受け応えをすると「トトロカン（行き届かない）」と言う。トウジンみたいだぞ」と言っただけ。唐人」というのは言葉の通じあわない、珍妙な身なりをした異人になぞらえて使いだされた言葉のように思われる。

室町時代末期から江戸時代にかけて、南から「南蛮人」と呼ばれたポルトガル人やイスパニア人が、ついでイギリス、オランダから「紅毛人」が渡来しだした。

この「南蛮人」や「紅毛人」にあたるのが、私たちの呼ぶ「唐人」で、「唐」は室町期より約七〇〇年も前に建国されているけれど、遣唐使のことを考え合えると、西暦六〇〇年代から、さまざまな階層の唐人たちが中国大陸から、そして朝鮮半島からは韓人たちが、日本海を横切って漂着してきたのではないだろうか。

このことは私の生れた山陰地方の海岸沿いのいたるところに「韓島」「唐神社」と名づけられた小島や社の実在していることから、容易に推察できる。

ことのついでに、もうひとつ書き加えておくと、田舎では「唐人」より一段上の、気の

完全に狂った人を「シンケ」と呼ぶ。これはたぶん「神経を犯された人」をつづめたものだろう。

こんなわけだから、私は「唐人」の段階で踏みとどまっていただけ、まだ救いがあったわけだ。

私の頼りない、糸の切れた風船みたいな都市巡りが、どれくらいつづいたか分らないが、唐人の脳の曇りも日ましに薄らぎだしてきた。そうなると今度はうって変って、「ここはチューリッヒだ」と言い張りだし、何度「違う」と諭されても耳をかさず、へ壊れた影の仕上りぐあいを、動かない手足を動かそうとしながら、ものに憑かれたようにしゃべりだすようになったそうである。

「幕開きは、原爆を暗示させるような鋭い閃光。つづく大音響で、数十本のちぎれた腕と足が、振り落とされ宙づりになって、ぶらぶら揺れる。

すると、一人の少女がシルエツトで写しだされ、もだえて倒れる。
のどかな陽ざし。

倒れた少女は全身に包帯を巻いていて立ち上ることができず、床を這いずりまわっている。

そばを往きかう人々に『ちょっと手をかして、立ち上らせてください』とたのむけれど、誰ひとり助けようとしなないどころか、彼女のひしやげた格好を真似て嘲り笑う」

——人間って冷いよなア、だから、ドラマになるんだらうけれど。

「次は、痛々しい少女のエレジー」。

上手かみてのそでから、少女そっくりの包帯をしたマネキン人形が滑り出てくる。少女はいざり寄ってそれを抱きしめ、彼女が自分自身に願っていることを、祈るような気持でやらせようとする。立たせようとしたり、歩かせようとしたり、だけど、その想いは通じないで、人形は空しく折れくずれてしまう。

ゆるやかに暗転。

月日は流れて、お盆になる。

顔もかくした黒子くろこの衣裳の女性四人が盆踊りを踊る」

——この踊りには手こずった。お尻をぶるん、ぶるんと振りながら、「マツカシヨ、マツカシヨ」と拍子とって踊る田舎の盆踊りをアレンジして振付けたんだけど、「マツカシヨ」と微妙に力を溜めるところが、ぼやけてしまってさまにならん。

明治時代の終りまで、日本人の八割は農民だったから、民俗舞踊のほとんどは農作業に

は欠かせない中腰が基本になっている。そして「エイッ」と鍬くわを入れ、「コッラ」と畠はたけの土を掘りおこす。鍬を入れた瞬間と、土を掘りおこす仕種しぐさの間にわずかな間まがあつて、そのところで動作が「ウウッ」と吃くもっている。この吃りがないと民俗舞踊の面白さは削そがれてしまう。

三味線の音階だつて「ツン テン シャン」と音がぶつ切れていて、「ツ」とか「ン」とかいつて吃っているから、この音に合せて踊る動きは節くれだつていて、角ばった梅の木のような風格がある。角ばっている個所が、着物の袖そでや袂たもとに丸く包まれて、あの優雅さをだしているわけだ。だけど、彼女たちの動きは「マカシヨ」と棒読みで、「マツカ」と節くれだつてこない。しびれを切らして、フランスから来ているダンサーのお尻を、思ひきりひつ叩いたら、しくしく泣きだしてしまった。

これは、このフランス人ばかりじゃないぞ。いまの日本にだつて、この傾向はある。そのいい例が、祭りのお神輿みこしだ。昔は意気のいい男衆が「ワッ、シヨイ、ワッ、シヨイ」つて掛け声をかけ、囃はやしながら担いだもんだが、近頃は女性が「セイヤ セイヤ」と担ぎだし、お神輿もやわになつてしまった。

もともと神輿は、神さまを囃して目覚めさせ、やる気を起させるための祭礼行事だから、

威勢がよくないと効果はない。「ワッショイ」の「ワッ」で神さまを吃驚させ、「ショイ」で背中をこづくわけだ。「セイヤ セイヤ」では、神さまが眠ってしまうよ。

最近、農作業が機械化されてきたから、日本人も西洋人なみに腰高になってきた。このぶんじゃあ、日本の盆踊りなどの民俗舞踊も、なしくずしになってしまいうさうだ。

「その盆踊りの踊り手たちが、頭にかざしている二本の赤い盆花を、うずくまっている包帯をした少女のからだのあちこちに挿して去っていく。

すると少女はしだいによりみがえってきて、ゆっくり立ち上るやいなや、解き放たれたように踊りだす。幕開きの場面で少女を笑い者にしていた通りの人たちは、全身赤い花で飾られた彼女の踊る姿を見て、腰を抜かささんばかりにたまげ、よつんばいになったまま立ち上ることができなくなって、舞台中を右往左往。そのなかを少女は蝶のように舞いつづける。

最後に彼女はからだに挿されている盆花の一本を抜き取って——この一本は竹トンボになっっている——それを、きりきりと舞いあがらせる。

溶暗。

音楽も終った静寂のなかで、舞台上手に弱いライトがおちて、そこに黒い雪がひらひら

降ってくる。そして、幕」

——ってな趣向だ。

竹トンボは、こっちにはないから、東京の友だちに電話して、竹で作った本物を二十本送ってもらったんだけど、西洋人は不器用で飛ばせられないんだ。それで特訓した。マネキンも街中さがしても少女のサイズに合うのがなかったので、ドイツまで行って、スポンジでできているのを見つけてきた。

幕切れの黒い雪は井伏鱒二の『黒い雨』からのヒントだけれど、こっちのお客にその意味が解るかどうか心配だ。舞踊団のディレクターは即座に「黒い雨だな」と言ったけど。

こんなふうなことを相手かまわず、くどくどほざいた後に、必ず、

「こうしちゃあ、おられん。早く仕事に行かなくちゃあ」

と大声をたて、ベッドに縛りつけてあるからだのベルトを切らんばかりにもがき、見舞いに来てくださった人たちに、ずいぶんご迷惑をおかけしたそうである。

入れ変り立ち変りのお見舞い客に付き合って、そのたびに聞かされた女房は、この作品の筋書きを全部そらんじてしまっていた。